

「読書へのアニメーション」幼児教育作戦に適した絵本の研究

Suitable picture books for infant strategies of the “Animación a la Lectura”

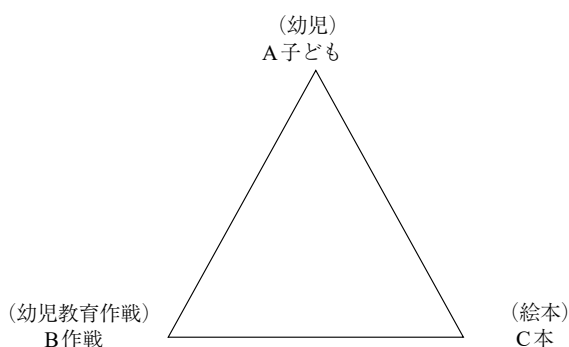
足立 幸子・名塚 裕子*

1. 問題の所在

スペインで生まれたモンセラット・サルトラの「読書へのアニメーション」は、幼児から高校生まで系統的にまた発達段階に応じて読書の力を伸ばしていくという目的で開発された集団読書の方法である。この方法が日本に紹介されて20年以上が経過したにもかかわらず、日本での作戦の用いられ方は場当たりのであり、発達段階の意味が十分に理解されているとはいいがたい状況にある。特に、幼児教育作戦は、実施される現場が小学校であることが多く、小学校での幼児教育作戦は「予読が不要である」という特性のみをとらえて、使用されているようである。

このような問題意識で、足立幸子・名塚裕子(2021)では、「読書へのアニメーション」の幼児教育作戦が、言葉の教育において発達段階上どのような特徴を持つのかを明らかにし、その特徴を生かした作戦の実施に適した絵本を、次頁の表1のとおり18冊提案した。しかし、これらの提案した絵本は、作戦の性質を分析した結果適していると推測される絵本である。一部は幼稚園教諭養成課程の大学生や読書へのアニメーションに関心を持つ大人に対しての模擬実践の経験があるが、すべての絵本について、実際に幼児に実践を行ってその効果を確認するまでには至っていない。

そこで、本稿の目的は、実際に幼児に作戦を実施し、提案した絵本が幼児教育作戦に適しているかどうかを確認することである。第2著者が勤務する幼稚園において、表1から選択した3冊の絵本について、作戦を実施し、子ども一作戦一本の3者が適切な関係を結ぶことができるかどうかを明らかにする。



【図1】読書へのアニメーションにおける子ども・作戦・本の関係

本研究で対象とするのは、図1のA子ども・B作戦・C本のうち、C本である。C本がB作戦に適しているかどうかを、実際のA子どもの姿を通して検証することとする。

2021.10.25 受理

* 新潟大学附属幼稚園

2. 研究の対象と方法

2.1 研究の対象

表1は、足立・名塚(2021)で提案した、幼児教育作戦に適していると考えられる本である。

【表1】 幼児教育作戦に適していると提案した本

足立・名塚(2021)を元に作成

幼児教育作戦	提案した絵本
作戦1 読みちがえた読み聞かせ	『いそがしいよる』(さとうわきこさく・え, 福音館書店, 1987年刊)
作戦2 これ、だれのもの?	『ムッシュ・ムニエルをごしょうかいします』(佐々木マキ, 絵本館, 2000年刊)
作戦26 ここだよ	『てぶくろ』(エウゲーニー・M・ラチョフ, うちだりさこやく, 福音館書店, 1965年刊)
作戦26 ここだよ	『おおきなかぶ』(ロシア民話, A・トルストイ再話, 内田莉莎子訳, 佐藤忠良画, 福音館書店, 1952年刊)
作戦27 これ、君のだよ	『アイラのおとまり』(バーナード・ウェーバー作・絵, まえざわあきえ訳, ひさかたチャイルド, 2009年刊)
作戦28 本から逃げた	『ひとまねござる』(H. A. レイ文, 絵, 光吉夏弥訳, 岩波書店, 1954年刊)
作戦28 本から逃げた	『どろんこハリー』(ジーン・ジオン作, マーガレット・ブローイングラム絵, わたなべしげお訳, 福音館書店, 1964年刊)
作戦28 本から逃げた	『からすのパンやさん』(加古里子, 偕成社, 1969年刊)
作戦29 物語を語りましょう	『にじいろのしまうま』(こやま峰子作, やなせたかし絵, 金の星社, 1996年刊)
作戦29 物語を語りましょう	『しょうぼうじどうしゃじぶた』(渡辺茂男作, 山本忠敬絵, 福音館書店, 1963年刊)
作戦37 だれが…でしょう	『ベレのあたらしいふく』(エルサ・ベスコフさく・え, おのでらゆりこやく, 福音館書店, 1976年刊)
作戦38 ここに置くよ	『お月さまってどんなあじ?』(マイケル・グレイニエツ, いずみちほこ訳, セーラー出版, 1995年刊)
作戦38 ここに置くよ	『十二支のはじまり』(岩崎京子文, 二俣英五郎画, 教育画劇, 1997年刊)
作戦47 これが私の絵	『のはらうたI』(くどうなおこ, 童話屋, 1984年刊)
作戦53 よく見る、見える	『はじめてのおつかい』(筒井頼子作, 林明子絵, 福音館書店, 1976年刊)
作戦55 聴いたとおりにします	『したきりすずめ』(石井桃子再話, 赤羽末吉画, 福音館書店, 1982年刊)
作戦55 聴いたとおりにします	『かにむかし』(木下順二文, 清水崑絵, 岩波書店, 1976年刊)
作戦65 そして、そのとき…が言いました	『ポケットのないカンガルー』(改訂版, エミイ・ペインさく, H.A.レイえ, にしうちミナミやく, 偕成社, 1994年刊)

そして、本研究では、これらのうち、『ひとまねござる』(作戦28本から逃げた),『にじいろのしまうま』(作戦29物語を語りましょう),『かにむかし』(作戦55聴いたとおりにします)の3冊を選択した。この3冊について、適しているかどうかを分析していく。

2.2 研究の方法

上記の3冊の本について、次の4つの実践を行った。

実践1 『かにむかし』（3歳児）

- (1) 日時 2021年3月9日（火）11:00～11:30
- (2) 場所 新潟大学附属幼稚園遊戯室
- (3) 対象児 3歳児 21名
- (4) 本と作戦 『かにむかし』（作戦55聞いたとおりにします）
- (5) 作戦の実施者 足立幸子
- (6) 記録者 名塚裕子ほか附属幼稚園教諭2名

実践2 『ひとまねござる』（5歳児）

- (1) 日時 2021年3月9日（火）13:00～13:30
- (2) 場所 新潟大学附属幼稚園遊戯室
- (3) 対象児 5歳児 27名
- (4) 本と作戦 『ひとまねござる』（作戦28本から逃げた）
- (5) 作戦の実施者 足立幸子
- (6) 記録者 名塚裕子ほか附属幼稚園教諭3名

実践3 『にじいろのしまうま』（3歳児）

- (1) 日時 2021年3月11日（木）11:00～11:30
- (2) 場所 新潟大学附属幼稚園3歳児保育室
- (3) 対象児 3歳児 21名
- (4) 本と作戦 『にじいろのしまうま』（作戦29物語を語りましょう）
- (5) 作戦の実施者 足立幸子
- (6) 記録者 名塚裕子ほか新潟大学附属幼稚園教諭3名

実践4 『にじいろのしまうま』（5歳児）

- (1) 日時 2021年3月11日（木）13:00～13:30
- (2) 場所 新潟大学附属幼稚園5歳児保育室
- (3) 対象児 5歳児 27名
- (4) 本と作戦 『にじいろのしまうま』（作戦29物語を語りましょう）
- (5) 作戦の実施者 足立幸子
- (6) 記録者 名塚裕子ほか新潟大学附属幼稚園教諭3名

作戦を熟知しているという理由で、第1著者の足立が作戦を実施した。実践3と実践4では同じ『にじいろのしまうま』を用いて、年齢によって子どもの反応に違いがあるかどうかを見ることとする。

2.3 記録・記述・分析の方法

記録の方法としては、1台の定点カメラによるビデオ撮影と、第2著者の名塚裕子を含む附属幼稚園教諭による筆記記録及びiPadによる動画撮影が行われた。また、翌週に附属幼稚園教諭4名で、作戦実施時の子どもの様子について、さらに、本について見聞きし感じたことを話し合い、出て来たことを箇条書きにして送ってもらった。それを本論文中では附属幼稚園教諭の観察として囲み表記にする。以上が本稿の分析及び考察のためのデータとなった。

一方で、アニメドール（作戦の実施者のこと）の実感も重要である。ビデオ記録をもとに、実施時の記憶を呼び起こし、実感を記述することとする。

本稿では図1のA子ども—B作戦—C本の接続を見ていくわけであるが、B作戦はどのようなものであったか、その時のA子どもの様子はどうであったか、その結果を通してC本はその作戦に適していたかどうかを分析していく。

3. 作戦の実施から考える本の適性

3.1 『かにむかし』

(1) 作戦55 聞いたとおりにします

「作戦55聞いたとおりにします」は、読み聞かせをよく聞き取ることを目的にした作戦である。いろいろな登場人物が出てくる物語をアニメーションが読み聞かせる。子どもは読み聞かせをよく聞きながら、割り当てられた登場人物を演じるように動作を行う。

(2) 子どもの様子

作戦55は、子どもが登場人物を演じるために体を動かすので、保育室より広い遊戯室を使用した。

最初『かにむかし』の場所（浜辺（蟹が柿の種を拾った場所）、蟹の家の庭（柿を植えた場所）、蟹の子もが出てきた場所、栗と出会った場所、蜂と出会った場所、牛の糞と出会った場所、はぜ棒と出会った場所、石臼と出会った場所、猿の家（さるのぼんば）などを指定して、子どもたちはそれぞれの場所に着いた。

読み聞かせが始まると初めのうち、子どもたちは熱心に聞いていた。しかし、読み聞かせを聞きながら自分が担当する登場人物に合わせて動作をするということがなかなか飲み込めず、うまく動けなかった。例えば、「かには おおよろこびで ……その かきの木に がしゃがしゃと はいのぼっていっちゃ おち、がしゃがしゃと はいのぼっていっちゃ おち、しておった」という本文では、這い上るという動作、落ちるという動作が必要になるが、特に落ちることができなかった。

このように子どもがうまく動作ができないということになると、読み聞かせをする第1著者も、その動作が行われるのを待ったり、あるいは動作をするように促したりして、読み聞かせが停滞してくる。また、記録を取りながら作戦を見守っていた第2著者及び附属幼稚園教諭も、子どもが動作を行うように促すような形になってしまった。

動作が行われたり行われなかったりしながら読み聞かせが長くなってくると、子どもの方の集中力も落ちていった。そうして中にはいつも遊戯室で行っているように、『かにむかし』とは関係のない行動を取ったり走ったりする子どもも現れた。

最後に感想を聞くところでは、どの登場人物が面白かったかを尋ねたが、多くの子どもが「はぜ棒」を挙げた。以上のようなことで、『かにむかし』の「作戦55 聞いたとおりにします」は一通りするべきことを行ったが、本来の動作をするために集中して読み聞かせを聴くという活動は十分に行えたとは言えなかった。

記録をとった附属幼稚園教諭は、次のように観察していた。

- ・登場人物が多く、みんなで楽しめた。
- ・どこかで聞いたことがあるお話だったが、知っているお話でもよく聞いていた。
- ・広い場所（足立注、保育室ではなく遊戯室であったこと）で集中がとぎれた。
- ・何かお面や、木や視覚的な物があると動きやすかった。
- ・最初に1回読んでからでもよかったか。（前日にでも）

本来、「作戦55 聞いたとおりにします」は、予読が必要な作戦ではないので、1度で読み聞かせを聴き取ってそのまま動作をすることを求めるものであるが、このような観察・考察が出るということは、やはり難しかったということであろう。

(3) 本についての考察

前稿（足立・名塚、2021）では、『かにむかし』を提案する理由として次ように述べている。

かにが種に水をやる、食べるなどよく分かる、栗がはぜる、石臼が落ちるなど、しだいに物語の盛り上がりとともに大きな動きになるところが面白く、この作戦に適していると考える。

(足立・名塚, 2021, p.181)

すなわち、動作のしやすさと物語の展開に着目していたと言える。

しかし、実際に『かにむかし』で作戦を実施してみると、『かにむかし』に描かれている登場人物の動作はもっと複雑で繊細であることが分かる。例えば、かにが種に水をやる場面をみてみよう。

かには その たねを うちの にわの すみに まいておいてから, まいにちまいにち せつせとみずを かけたり こやしを やったりしては,

「はよう 芽を だせ かきのたね, ださんと はさみで, ほじりだすぞ」

というおったら, かきのたねは, ほじりだされては かなわん, とおもうたかして, やがて ちいさな 芽を だしたそう

(木下, 1959, p.4, 下線引用者)

この場面では、蟹としては「種を（庭の隅に）蒔く」、「水をかける」「こやしをやる」の3つの動作を行うことになる。「水をかける」と「こやしをやる」が「たり」でたたみかけられていて、頻回を表しているのだが、単純にこのような言葉の動作を行おうとすると戸惑いを生むこととなるであろう。「水をかける」の動作はできるであろうが、「こやしをやる」というのがどのような意味か、どのような動作になるのか、3歳児は理解できるであろうか。「ほじりだす」動作は、仮定法で述べている部分なので、動作をしなくてもよいかもしれない。このように、動作は単純ではない。

登場人物が、はぜ棒や牛の糞と言った動物でないものであることは、問題ではなかったようだ。しかし、最初に死んでしまった蟹は1匹である。しかし、その後多くの(18～19頁の絵によると、少なくとも38匹の)「かにの こどもが、ずぐずぐ ずぐずぐと たくさんに はいだして きた」というところが分かりにくい。

この本は、語彙も難しい。3歳児の生活の範囲では見聞きしない、昔の日本の農村の生活に関する用語が頻出している。慣れない方言も用いられている。

集中力が途切れた理由の1つとして、本の長さが挙げられる。この本は全部で42頁あり、分かち書きのスペースや句読点を除いた文字数は3353字であった。後で述べる『にじいろのしまうま』が30頁、1031字なのに比べてページで1.4倍、文字数で3倍以上にもなる。

記録者の幼稚園教諭もこの本について次のように述べている。

- 『かにむかし』は、きっと1度は聞いている本だ。でも今回の木下順二版の言葉は難しかったし長かった。子どもが自分の役をよくわかるようにするにはお面などを身に付けた方がよく聞けると思った。
- 『かにむかし』は年長もり組だったら、「聴いたとおりにします」では、役柄の好みとか、仲間関係とか、本の世界に入るのに邪魔になる要素が考えられた。そうすると、3歳児にとって難しいような本でも、「へっついほう」でも「ふん」でも構わないのは、お話の筋が面白かったからだと思う。

『かにむかし』に価値がないというわけではないが、3歳児には「作戦55 聴いたとおりにします」を行うには、難しく長すぎたと言える。5歳児には、作戦実施を行っていないので推測の域を出ないが、登場人物の好みという新たな問題が出てきて、この作戦が行いにくいのではないかという。

結論として、『かにむかし』は、3歳児に「作戦55 聴いたとおりにします」は適していないと言える。

3.2 『ひとまねこざる』

(1) 作戦28 本から逃げた

「作戦28 本から逃げた」は、子どもたちが本に親しめるように、絵が表現することに注意を向けさせ

るようにする作戦である。まず子どもたちは、1人1冊ずつ持った絵本を眺めながら読み聞かせを聞く。その後、配られた挿絵が、この本に出てきた挿絵であったかどうか、登場人物や状況をふまえて答えるというものである。

(2) 子どもの様子

この作戦も遊戯室で行った。子どもは1人に1冊ずつ本を持ち、挿絵を眺めながら読み聞かせを聴くので、机を出し、着席する体制をとった。

最初、読み聞かせを聞きながら、適切に手元の本の頁をめくっていくことは、スムーズにできていたが、後半少しタイミングがずれている子どもがいた。

その後、『ひとまねござる』の挿絵と、同じシリーズである『じてんしゃにのるひとまねござる』(H. A. レイ文・絵、光吉夏弥訳、岩波書店、1998年)及び『たこをあげるひとまねござる』(H. A. レイ文・絵、光吉夏弥訳、岩波書店、1998年)の挿絵を1枚ずつ画用紙に貼ったものをカードとして、1人1枚子どもに配った。子どもはそれを見て、先程の読み聞かせに出てきた登場人物・場面であったか、またどうしてそのように分かったのかを答えていった。一部言いよどむ子どももいたが、概ね上手に答えることができていた。

作戦28の人数は20～25人ということになっているが、実際の子どものはそれ以上いた(27人)ので、やや長がかかってしまった。

しかし、アニマドールとしては、ほぼ狙い通りに作戦が実施できたという感覚であった。

記録をとった附属幼稚園教諭は、次のように観察していた。

- ・1人1冊ずつ配られたことで、とても嬉しそうであった。
- ・話がスタートするとよく聞き、ページを自分でめくるということを楽しんでいた。
- ・アニマドールの淡々とした語り口調で、スムーズに物語に入れたように思う。
- ・子どもたちの知っているキャラクターということもあり、入りやすかったように思う。
- ・後半ページをめくるのに遅れる子が出始め、集中が途切れる子が数名見られた。
- ・質問が始まると「どうしてそう思う?」という問いにも考えを巡らせて答えようとしている姿が多く見られた。(それを負担に思う子も数名見られた)

(3) 本についての考察

前稿(足立・名塚, 2021)では、『ひとまねござる』を提案する理由として次ように述べている。

絵の中には、読み聞かせた絵本から取ったもののほかに、できれば同じ画家の別の作品の似たような登場人物や場面の絵が入っているとよい。候補として次の3冊を挙げる。1冊目は『ひとまねござる』(H. A. レイ文、絵、光吉夏弥訳、岩波書店、1954年刊)である。好奇心が強く人が行っていることをしてしまうござるのじょーじが、様々な仕事を行うという話である。かわいらしいじょーじの行動は愛されるし、子どもの好奇心と重なるところもある。ひとまねござるにはたくさんのシリーズがある。……(中略)……ただ、少し話が長いので、読み聞かせを行う時はテンポよく読んでいく必要があるであろう。もう少し短い絵本ということであれば……(以下略)

足立・名塚, 2021, p.185

すなわち、じょーじというという登場人物の魅力と、シリーズがあるという2点である。長さについては(46頁、3822字)ということ、前稿の段階でも認識できており、そのため2冊目・3冊目としてはもっと短い本を推薦している。話の長さから、テンポよく読み聞かせを行うことを心がけたが、そのためページのめくりが遅れる子どもも出てきてしまった。

記録者の幼稚園教諭もこの本について次のように述べている。

- 『ひとまねござる』は子どもたちの興味や発達に合った本だと思った。テーブルで広げられて落ち着いて、絵の隅々まで見て楽しめた。絵の細かさから言っても、年長児に向いていた。
- お話の世界にはすぐに入った。ただ、普段と違うこれから行われることの手配のようなことをして、見通しが持てるとまたいっそう本の中身に入れると思った。

3.3 『にじいろのしまうま』

(1) 作戦29 物語を語りましょう

「作戦29 物語を語りましょう」は、読み聞かせの後で、アニマドールの質問に導かれながら、子どもたちが物語をつくりなおすという作戦である。

読み聞かせ時は、アニマドールである第1著者の手元に1冊本を置いて読み聞かせを行ったが、「読み聞かせのあとで本を配り、子どもたちが本を手にして」数分間「じっくり絵〔像〕をながめ」(サルト, 134頁)られるようにした。

読み聞かせの後に、もう1度振り返って物語をたどるやり方は、アメリカ・イギリスなどの英語圏の読み聞かせではよく行われていて、Recall(再話)と言われる。物語を再び楽しむという面と子どもが理解しているかどうかを確認する評価の面がある。

作戦29の物語をつくりなおすための質問は、本文の1文の中に問いと答えがあるように作る。RaphaelのQAR (Question-Answer Relationships: 質問と解答の関係) でいうと、Right Thereにあたるような形である。例として、表2『にじいろのしまうま』11場面 (22, 23頁) の質問を示す。11aのような形が原則である。しかし、子どもの答え方を予想し、関連する質問も用意しておく。11bのような形である。さらに、11dや11eは11cの解答がうまく出なかった場合などに用意する別の問い方である。このようにして、全てで51の質問を用意しておいた。51の全ての質問を行うのではなく、臨機応変に飛ばしたり、加えたりして、作戦29を行った。

【表2】 『にじいろのしまうま』11場面 (22～23頁) の質問例

質問番号	本文と質問 (解答)
11場面 (22頁)	おいのりが おわったとき、にじいろの しまうまの からだから、みずいろが きえました。
11a	・お祈りが終わった時、どんなことが起こりましたか。(しまうまの体からにじいろが消えた)
11b	・では、まず最初に起きたことを言ってください。何色が消えたのですか。(水色)
11場面 (23頁)	からだから はなれた みずいろが、にじの かたちの せんを えがきながら、かわに ながれていきました。
11c	・水色はどんな風に消えたのですか。(虹の形の線を描きながら消えた/川に流れていった。)
11d	・消えた水色はどこに行きましたか。(川に流れて行った。)
11e	・消えた水色はどんな風に、川に流れていったのですか。(線を描きながら川に流れた)

アニマドールは1人に1つずつ質問をしていくことになっているが、サルトは「読み聞かせに慣れておらず、思ったことをうまく表現できないごく幼い子どもの場合は、全員に質問をし、皆で答えてもらうようにするとよいでしょう。」(サルト, 134頁)とも述べている。3月9日の作戦実施では、3歳児の『かにむかし』の読み聞かせが難しい様子が見られたので、また、5歳児も1人ずつ順番にカードを配ってそのカードについて答えてもらうのに時間がかかったように感じていたので、今回は1人1人別の質問にせず、質問を投げかけて答えたい人が自然に答えられるようにした。

(2) 子どもの様子

3歳児でも、5歳児でも、読み聞かせは集中して聞いていた。

その後、絵本を配付すると、喜んで絵本を眺めていた。5分程度経って満足したようだったので、質問を投げかけていった。3歳児でも概ねよく答えられていた。5歳児はとでもテンポ良く答えることができたので、予想していたよりも早く20分程度で全ての質問に答えてしまった。

記録をとった附属幼稚園教諭は、3歳児と5歳児を次のように観察していた。

〈3歳児の様子〉

- ・絵がきれいで、引きつけられる。
- ・一人一人に絵本が配られたことが楽しかった。
- ・自分なりに読んで（ページをめくって）物語を楽しむことができた。絵を見て楽しむことができた。
- ・足立先生の落ち着いた声子どもにとってよかった。（その後、足立先生に甘えたのがおもしろかった。精一杯歓待していた。楽しい時間を共有できたお礼か）

〈5歳児の様子〉

- ・前回同様、1人1冊ずつ配られ、うれしい様子が見られた。
- ・アニマドールの話にそってページをめくっていきが、テーブルと椅子の時より集中が続かない様子であった。
- ・アニマドールの質問に思いを巡らせ、細かいところまで振り返ることができる子が多いと感じた。
- ・そうでない子もいたが、今回は一人一人での返答ではなく、複数の子どもが声を出すというやり方だったことで、心の負担が少なかったと思う。
- ・登場人物の気持ちやお話のすじを楽しめたかはわからない。

(3) 本についての考察

前稿（足立・名塚, 2021）では、『にじいろのしまうま』を提案する理由として次ように述べている。

この作戦は「三十分か三十五分以内におさめます」とされているので、やはりあまり長くないものの方が適していると言える。『にじいろのしまうま』（こやま峰子作、やなせたかし絵、金の星社、1996年刊）は、……（中略）……ストーリーを追うことのできる質問を適切に作れることから、作戦29に適していると言える。やなせたかし氏の単純な絵と色使いから、物語の内容を把握しやすい。第二著者は以前小学校に勤務していた際、小学校1年生の子どもがこの本について「すごくいいお話だよ」「かわいそうなんだ」「泣いちゃった」などと言っていたことを覚えている。入学前にこの本におそらく保育園で出合っ、気に入ったのだろう。もしもこの本で現在勤務する幼稚園でこの「作戦29 物語を語りましよう」を行えば、子どもは喜んで語るだろうと推測する。

足立・名塚, 2021, p.184

すなわち、提案理由は本の長さ、ストーリー展開と、絵の性質である。

本の長さについて、この作戦では、読み聞かせを1度行った後に、もう1度語り直しをするので、2回読み聞かせを行う以上の時間がかかる。『にじいろのしまうま』は30頁であり、文字数は分かち書きのスペースや句読点を除いて1031字である。前述の『かにむかし』（3353字）『ひとまねこざる』（3822字）の3分の1以下であり、実際、読み聞かせもその後の再話も、スムーズに進行することができた。

ストーリー展開も、明瞭であり、子ども達は十分にストーリーを追って、質問に答えることができた。予想以上によくできた。前述の附属幼稚園教諭の観察には「登場人物の気持ちやお話のすじを楽しめたかはわからない」とあるが、少なくとも、「お話すのすじ」（＝ストーリー展開）を理解できたことは、十分に評価できる。

絵も美しく物語の内容の把握に貢献したと考えられる。

記録者の幼稚園教諭もこの本について次のように述べている。

- 『にじいろのしまうま』を1冊ずつもらって3歳児は自分で字を指で追いつながら、自分の言葉でお話を語っていた。本の展開がわかって、自分でお話を人に伝えたいようだった。
- 今回扱ったのは、どれも良書であると思う。発達段階に合っているかというところは難しかった。ただ読んで楽しむのなら、年齢差は関係ない。しかし、読んだ後に問えば問うほど物語の価値が薄くなっていったり飽きていったりしてしまった。理解する、感じる、考えるという段階に分けたとして、何がどうできればいいのか子どもも難しかったし、教師も難しかった。「好きな場面」で自由に話したり、我先に話し始めたりしたことはあったが、読んだ後に質問があると、20人以上の人数が多すぎたのかもしれない。
- 「にじいろのしまうま」では、読み手でないからか、子どもがどの場面や話のどこが好きかをつかめなかった。

2点目と3点目は、『にじいろのしまうま』の本が「作戦29 物語を語りましょう」に適しているかどうかというよりは、通常自分が行っている読み聞かせとは違う方式に対する教諭の違和感なのであろうと第1著者は推測する。その証拠に、この教諭は2点目・3点目に関連して次のようにも述べている。

（自分が読み手の時は、少し誘導したりしているのかなと思った。場面の展開を一緒に楽しむような一体感を感じている。感じるだけで、十分に一人一人の思いはつかめないし、全体として読後感を味わうように終わっている。子ども自身も言語化できないところがあり、表情やため息、つぶやき、本の世界から出て隣のおしゃべりをしたりする。そのサインを受け取って（感じて？）退屈かな、とか難しいかなと思う。）

これらは、普段の読み聞かせに対する教諭の振り返り・考察である。今回は附属幼稚園の現場をお借りして、前稿で提案した幼児教育作戦に対する絵本が適しているかどうかを、実践を通して明らかにしてきた。幼稚園の保育現場で、どのような場面でアニメーションや読み聞かせ（第1著者は、読み聞かせの方式は1種類ではなく、多様にあるべきであると考えている）のどのような活動が適しているかについては、また異なる論文で研究していきたいと考える。

結論としては、「作戦29 物語を語りましょう」に対して『にじいろのしまうま』という絵本は、適していると言うことができる。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、読書へのアニメーションの幼児教育作戦に適していると提案していた18冊の絵本のうち、3冊について、実際に幼児にアニメーションの作戦を実施することを通して、本当に適しているかどうかを明らかにすることであった。令和3年3月に新潟大学附属幼稚園の3歳児と5歳児に、全部で4つの実践を行い、作戦の実施（B作戦）、実施時の子どもの様子（A子ども）をふまえることで、3冊の絵本（C本）の適性を判断した。その結果、『かにむかし』は3歳児の「作戦55 聞いたとおりにします」に適していない、『ひとまねごころ』は5歳児の「作戦28 本から逃げた」に適している、『にじいろのしまうま』は5歳児の「作戦29 物語を語りましょう」に適しているとの結論を得た。ただし、「作戦55 聞いたとおりにします」と『かにむかし』のB作戦—C本の組み合わせを、5歳児のA子どもに対して行うとどうなるかということは、本研究では明らかにできなかった。

今後の課題としては、残る15冊の絵本について、それぞれの作戦に適しているかどうかについて、実践的に明らかにすることである。さらに、「読書へのアニメーション」の幼児教育作戦を保育のどのような場面で用いることが有効かについても検討が必要である。

謝辞

本稿の執筆にあたり、新潟大学附属幼稚園の教諭の皆様、園児の皆様にご多大なるご協力をいただきました。心より御礼を申し上げます。

文献

- 足立幸子・名塚裕子(2021)『『読書へのアニメーション』 幼児教育作戦の研究』『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』 13(2), 173-189.
- 木下順二・清水崑(1959)『かにむかし』岩波書店
- こやま峰子, やなせたかし(1996)『にじいろのしまうま』金の星社
- Raphael, T.E.(1986) Teaching question-answer relationships, revised. *The Reading Teacher* 39, 516-523.
- Rey, H. A.(1947). *Curious George takes a job*. Houghton Mifflin Company. H.A. レイ, 光吉夏弥訳(1954)『ひとまねこざる』岩波書店
- Sarto, M. M. (1998). *Animación a la lectura con nuevas estrategias*. Ediciones SM. M・M・サルト, 宇野和美訳(2001)『読書へのアニメーション—75の作戦—』柏書房